The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	聖ラースロー物語再考 ： 中世における聖ラースロー崇敬の隆盛
Author(s)	鈴木, 広和
Citation	ハンガリー研究. 2023, 2, p. 27-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90930
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

聖ラースロー物語再考

―中世における聖ラースロー崇敬の隆盛―

鈴木　広和

はじめに

本稿で紹介するのは、ハンガリー国王ラースロー 1 世（在位 1077–1095）にまつわる伝説である。王は死後 100 年ほどして 1192 年に国王ベーラ 3 世（在位 1172–96）の主導によって列聖された。ラースロー1 世は、ハンガリー王国初代国王イシュトヴァーン 1 世（在位 1000–1038）の死後に揺らいだ王国の体制を建て直した国王である（Klaniczay 2000: 154）。教会組織の再編も行い、1083 年にはイシュトヴァーン 1 世とその早世の息子イムレなどを列聖したことでも知られる（Klaniczay 2000: 114–122）。しかしなぜベーラ 3 世がラースロー1 世を列聖したのかは、はっきりしない [1]。ラースロー1 世に対する崇敬は、列聖以前には見られず、むしろ列聖を契機として 13 世紀以降に広まった（*Magyarországi művészetí*: 207, Klaniczay 2000: 157–159）。

13 世紀には、1241 年から 1242 年にかけてモンゴル軍の襲来があり、ハンガリー軍は大敗し、一時国王が国外に逃れたという大事件があった。モンゴル軍がハンガリーに襲来する少し前に、黒海北岸あたりでモンゴル軍に敗北したクマン人の一部がハンガリー王国に逃げ込んできていた。このクマン人をめぐってその後、王国内に様々な問題が生じた（拙稿 2000）。また 1285 年にもモンゴル軍の侵入があった。このように、外敵から王国を守る強い王の登場が期待されたという状況もあり、13 世紀の間に聖ラースロー崇敬が広まったと考えられる。

ラースロー1 世の列聖直後に書かれた二つの聖人伝が現在、知られている。王がいかに聖人にふさわしい人物であったかについて、あるいはラーススーにまつわる聖人にふさわしい奇蹟などが書かれた [2]。しかし

13 世紀に人々の間に聖ラースロー崇敬が広まるにつれて、これらの聖人伝には書かれていない、ラースローの聖性を示すいろいろな伝説が形成された。これらの伝説は年代記などの記述から知ることができる（*Magyarországi művészeti*: 207）[3]。

他方、教会においては、13 世紀の典礼テクストのなかで聖ラースローが称賛されたことにより、聖ラースロー崇敬が広まっていった。そこでは「キリスト教戦士の柱 columpna milicie christianae」、「疲れを知らない祖国の保護者・勇者 defensor indefessus et athlete patriae」などと、ラースローの騎士、戦士としての側面が強調された（Klaniczay 2014: 35）。ここで、聖ラースローにキリスト教と祖国の二つを守る役割が期待されていることに注意しておきたい。

13 世紀に形成された聖ラースロー伝説のなかに、騎士聖人として異教徒と戦う活躍を描いたものがある。それこそがラースロー1 世について最もよく知られた伝説であり、本稿でとりあげる伝説でもある。一般に「聖ラースロー伝説」Szent László-legenda と言えば、この話のことを指す場合が多いが、その他の聖ラースローに関する伝説や上記聖人伝と区別するために、本稿では、さしあたり「聖ラースロー物語」と呼ぶこととする。この物語も 13 世紀の間にしだいに口承により広まり（Klaniczay 2014: 34）、様々なヴァリエーションを生んでいったと考えられている。崇敬が広まるなかで、聖ラースローの主たるイメージは、異教徒と戦い異教徒から王国あるいはキリスト教を守る騎士聖人となっていった[4]。

1　聖ラースロー物語概要

聖ラースロー物語の舞台、枠組みとなっているのは、1068 年のケルレーシの戦いである。ハンガリー王国に東方から侵入したペチェネーグ人らに対し、当時の国王シャラモン（在位 1063–1074）と、王族であるゲーザ、ラースロー兄弟の率いる軍勢が、トランシルヴァニア地方北部のケルレーシ（現ルーマニア[5]）で勝利をおさめた戦いである。ただし聖ラースロー物語では外敵はペチェネーグ人ではなく、クマン人だとされることが多い。この戦いのときラースローはまだ国王ではなかったが、物語

では聖人として王冠をかぶって描かれることが一般的である(Marosi 1995: 77)。

他方、物語の基本的な筋立ては誘拐婚（略奪婚）である。ラースローか率いるハンガリー軍とクマン軍の衝突のなかで、あるクマン人がハンガリー人の娘を攫って逃げていくのをラースローが見つけて追跡する。ラースローとクマン人の格闘が続き、ラースローは娘の助力を得て、あるいは得ずにクマン人を討ち、殺すという筋立てである。

誘拐婚は西欧でもよく知られている話であるが、話の筋は 2 種類にわけることが可能であろう。一つは誘拐者の男性が女性の同意なく攫っていく場合である。このパターンを［誘拐婚 1］としよう。親族などが娘の救出に向かうことになる。他方、女性と誘拐者の間に予め同意ができている場合もある。女性の両親が結婚に反対している場合などにありうるパターンで、女性が男性とともに両親、親族などから逃走することになる［誘拐婚 2-1］。ただし同意があった場合も、男性が娘の命をとろうとしていることなどが後でわかり、青髭伝説のように娘が助けを呼び男性を殺すという筋もありうる［誘拐婚 2-2］[6]。

様々なパターンの誘拐婚の口承が聖ラースロー崇敬と結びつき、ケルレーシの戦いを舞台として成立したのが、聖ラースロー物語だとみて大きな間違いはないと思われる。しかし物語にはそのほかのさまざまな要素が入り込んでいる可能性があること、誘拐婚と騎士聖人の活躍とは、必ずしもうまくむすびつかないような側面もあることなどが原因となって[7]、この物語には様々なヴァリエーションができたのだと考えられる。この物語の具体的な成立過程、つまり多様な要素がいついかにして話の大筋にとり込まれて、現在知られている複数のヴァリエーションが成立したのかを明らかすることは不可能である。

現在知られている聖ラースロー物語は、14 世紀以降に年代記などで記述されたもののほか、13 世紀末から 15 世紀の間に、ハンガリー王国各地の教会に描かれた壁画が知られている。物語をいくつかの場面に分けて描いたフレスコ画である。80 近いの壁画が存在したことが知られているが（Jánó 2017: 47）、保存状態は様々である。年代記なとの叙述史料と

壁画とでは話の筋が異なるものがある。また壁画の間でも時に例外的なものが見受けられる。私見では、これらの相違は、上記の誘拐婚のヴァリエーションによって生じた部分が大きい。

聖ラースロー物語は民族学、文学史、美術史や文化史、社会史などのさまざまな分野が関わる研究対象であり、実際 19 世紀以来、ハンガリー内外の諸分野の研究者がそれぞれの専門的見地からとり組んできた。しかしこれまで必ずしも総合的、学際的に研究されてきたとは言えない。近年、ハンガリー内外で研究が活発になってきているが、未解明の問題も多い。

先行研究のなかには、この物語はキリスト教的装いが施されているが、基本的にはハンガリー人の祖先が、現在ハンガリーがあるカルパチア盆地に移住してくる前から、つまり太古の昔からもっていた英雄叙事詩やシャーマニズム的な物語を表現したものであるとする説がある（Vargyas 1980, László 1993, B. Kovács 2019）[8]。それに対し西欧にも同様の文化的、芸術的モチーフが見られることを示し、強調する研究者もいる（Vizkelety 1981, *Magyarországi művészetí*: 206–207, Marosi 1995）[9]。物語の起源を探究する研究では、起源が東にあるのか西にあるのかという二元論的な議論になりがちである。壁画に描かれた各場面と似た図像を、世界各地の様々な時代の図像資料などから探し当てて論が展開されるのであるが、その際の問題点は、一つには、類似していても起源が同じとは限らないため、決定的な根拠にはなりえないという点である。

もう一つの問題点は、西すなわちヨーロッパはキリスト教文化で、東は遊牧的、異教的文化という前提に立った議論が展開されがちな点である。中世ヨーロッパの文化にキリスト教改宗以前の異教的要素が見られたことは言うまでもないが、そのことが見落とされることが多い。またカルパチア盆地にハンガリー人が入ってくる前から住んでいたスラブ系の人々の間にも、非キリスト教文化が残っていて、それがハンガリー人の口承や民俗に影響を与えた、あるいは入り込んだ可能性が考慮されない傾向も見受けられる。

したがってここであらためて物語の起源探しに取り組むことは避け

なければならない。本稿に課せられた課題は二つある。一つ目は、この物語を紹介することを目的とした前稿（鈴木 2011）の誤りを修正しつつ、それ以降に発表された研究の成果の一部を取り込んだ上で、この物語について、筆者なりの解釈を示しながら紹介、説明することである。二つ目は、この物語がなぜ普及し人気を博したのか、その背景として想定しうることを示すことである。なお、前稿ではこの物語を「聖ラースロー伝承」と表記していたが、本稿では「聖ラースロー物語」と表記することと、物語の内容紹介の部分は前稿と重なる部分が多いことを予め断っておく。

1　壁画に描かれた聖ラースロー物語

物語の壁画は上述のように、13 世紀末から 15 世紀末にかけて制作され、80 箇所近くが知られている。王国の北部と東部の辺境地域に集中しているが、それ以外の地域にも見いだされる。ただし、いわゆる大平原の地域には少ない。現存するものは多くが小さな村にあるが、かつてはそれぞれの地域で重要な居住地だったことがわかっている場合も多い（László 1993: 183–184）。

各地の教会壁画では物語は次のように、いつくかの場面に分けて描かれた（各地の壁画の画像については、https://www.szentlaszlo.com/などを参照せよ。）

［ハンガリー軍出陣］王国に侵入した外敵クマン人を迎え撃つべく、ラースローを先頭にハンガリー軍が（ヴァーラド）城から出陣する。

［合戦］ハンガリー軍とクマン軍の合戦。次の追跡場面と合わせて描かれる場合もある。

［追跡］ハンガリー人の娘を攫って馬に乗って逃げるクマン人を、ラースローが槍を脇に抱えて馬で追う。クマン人は後ろ向きに矢を放つ。ラースローの槍がクマン人の胸や首を貫いている壁画もあるが、クマン人は死なない。

［素手での格闘（取組み合い）］ラースローとクマン人は馬から下りて組み合って格闘する。傍らで馬どうしが戦う壁画もある。娘がクマン人の

アキレス腱または脚を斧か剣で切る。（これでようやく決着がつく。）
［斬首］ラースローが族長の髪をつかみ、娘が族長の首を切る。
［休息］木の下でラースローは娘の膝枕で休み、娘はラースローの髪をなでる。

図 1　ヴィトファルヴァの壁画（斬首の場面）
出典：Wikimedia Commons, File:Vitkovce2FotoThaleTamas.JPG

教会によっては一つか二つの場面の断片しか残っていない、あるいは現在はほとんど判別できないような状態となっていて、19 世紀の写生や写真などからしか知ることができないものもある。他方、もともと［出陣］や［休息］などの場面などがない壁画もあるが、いずれにせよ騎士ラースローが異教徒を討って娘を救う活躍を描いている。ラースローには聖人であることを表す光輪が必ずといってよいほど描かれており、また相貌がキリストを思わせるものもある。つまりラースローは単なる騎士ではなく、異教徒からキリスト教あるいはハンガリー王国を守る騎士聖人として描かれている、あるいはキリスト教的な価値を体現し守る騎士として聖王ラースローが描かれていることは間違いない。

この背景には、ハンガリーで西欧の騎士文化が受容された後に、キリ

スト教と強く結びついたことがある。他方、ビザンツ帝国において皇帝マヌエル 1 世コムネノスの治世（1143–1180）に戦士である聖人に対する崇拝が広まり、これが聖ラースロー崇敬に与えた影響も指摘されている。ラースロー1 世を列聖したベーラ 3 世は、マヌエル 1 世により後継者として指名されビザンツ宮廷で養育された経験を持つためである。なおマヌエル帝の母親は、アールパード家のピロシュカ（ビザンツ名はエイレーネ）であった（Klaniczay 2000: 159-161）。

聖ラースロー物語におけるクマン人は単なる外敵ではなく、キリスト教に敵対する異教徒として、悪魔的な存在として描かれることもある[10]。クマン人が火や毒気のようなものを吐き出すばかりか、クマン人の馬が火をふいている壁画もある。また中世ラテン・キリスト教世界では、異教徒が死ぬときに、その魂を悪魔が持ち去るといった見方があったが[11]、図 1 は、まさにそれを図像化したものもある。

壁画に描かれた物語の多くは大筋で一致するが、なかには例外的なものもある。全体的にが一致する傾向があるだけに、例外的なものに注目することで見えてくることがある。以下に挙げる例外はすべて 14 世紀に制作されたものである。15 世紀以降はある程度、型が定まってくるのかもしれない。

【例外 1】グムルラーコシ Gömörrákosi（現スロヴァキア）の壁画（14 世紀末頃[12]）】（László 1993: 155–158）

この壁画には例外的な点が二つある。一つは娘が全く登場しないこと、もう一つは、合戦場面で逃げる馬上のクマン人の髪を、ラースローが後ろから引っ張っている図が２回描かれていることである[13]。娘が登場しないのは、誘拐婚の話が盛り込まれていないということである。つまりケルレーシの戦いにおけるラースローの活躍のみを描いた、聖ラースロー物語の原型ではないかと考えられる。元々は人々の口承世界で、このような話が語られており、そこにしだいに誘拐婚の話が絡み合って行ったのではないだろうか。というのも、実際に外敵が王国に侵入してきた際には略奪しただけではなく、人を攫っていったという事実があるから

である。この点は次の例外２につながる。

この壁画では、合戦場面のあとは他の壁画同様、追跡場面が描かれるが、現在確認できるのはそこまでである。追跡のあと、ラースローが、合戦場面に描かれているようにしてクマン人の髪を引っ張って引きずりおろし、次に素手での格闘に移行したというヴァリエーションが描かれていたという可能性、あるいはそのような話が口承で伝えられていた可能性もあるかもしれない。もしそうであればラースローが髪を持ち馬から引きずり下ろしたことが、下で見るように、娘がクマン人の帯をつかんで、クマン人もろとも馬から落ちたという話へと転化したということも考えられる。

【例外 2】ブグズ Bögöz（現ルーマニア）の壁画（14 世紀前半[14]）】（László 1993: 57–62）

この壁画では娘を攫っていくクマン人が複数いる。つまり攫われた娘が複数描かれている。上に見たように、外敵により多くの人が攫われたという現実があったことが背景にあると考えられる。ブグズはハンガリー王国東端に近いところにあり、そのような被害にあった住民もいたであろう（Lukács 1980: 177）。聖ラースロー活躍の話に、誘拐婚が結びついた背景には、このような現実があったのでないかと推測される。下で見る年代記の記述のように、捕虜となる者も多かった。

【例外 3】バーントルニャ Bántornya の壁画（1389 年[15]）】（László 1993: 175–181）

この壁画では、最初の場面で城の前景に、娘を攫っていくクマン人の姿が描かれている。そして何より特徴的なのは、次の場面でクマン人が娘の膝枕で休息していることである。そのあとは合戦・追跡、格闘、斬首と他の壁画と同様の展開になる。これは女性の同意に基づいた［誘拐婚 2-2］のパターンが、当時の人々に語られていたことを示す貴重な例外であると言えよう。これが例外的であることはつとに指摘されてきた。しかしこの場面が合戦の前におかれていることについて考慮した研究は

管見の限りない。この壁画の順序で話を再構成するなら、通常の始まり方、すなわち娘を攫っていくクマン人を見てラースローが出陣するのではなく、王国に侵入し略奪して引き上げていくクマン人たちを、ハンガリー軍が追っていき合戦となったということになる。これは実際のケルレーシの戦いと合致する。その後、合戦の後に捕虜となった住民を救ったという展開を加えたストーリーが、バーントルニャに描かれている。他の壁画と異なる独自の展開は、【例外 1】に描かれたようなラースローの武勇伝と、【例外 2】のような捕虜となった女性を救う話を合わせたような口承が元になっていると推測できる。14 世紀には現在最もよく知られているのとは異なるヴァリエーションも語られていたのであろう。

【例外 4】ブグズとマクシャ Maksa（現ルーマニア）（14 世紀中頃[16]）】（László 1993: 57–62, 69–72）

合戦ないし追跡場面の上空に布がはためいている。どちらの壁画も現在は上部が破損などで見ることができない。以前、これは旗か何かと見られていたが、ヤーノーはこれを空中に浮かぶ聖母マリアの服の裾だと見た（Jánó 2017: 58–61）。十分にありうる説である。聖母マリアと聖ラースロー物語の関連については、第 4 章第 3 節で見る。

２　壁画以外に描かれた聖ラースロー物語

２－１　『彩飾年代記』の記述と挿絵

まず年代記（実際には歴史書であるが慣例にしたがい年代記とする）をとりあげる。はじめは 14 世紀前半に編纂された『彩飾年代記』である。ラヨシュ 1 世の宮廷で編纂されたもので[17]、ラテン語テクストのほかに色彩豊かな挿絵が多数ある。聖ラースロー物語の記述や挿絵も見られる。また、15 世紀後半に書かれたトゥローツィの年代記は、『彩飾年代記』の聖ラースロー物語の記述を、ほぼそのまま取り込んでいる（Johannes de Thurocz: 99–100）。『彩色年代記』記述は次のようである。

聖ラースロー公は異教徒の一人が馬上に美しいハンガリー人の娘を連れているのを見た。聖ラースロー公は娘がヴァーラド司教の娘だと思い、重傷を負っていたけれども、栗毛と呼ばれる自分の馬に乗って急いで追いかけた。槍が届くまで近づいたが突けなかった。自分の馬はそれ以上早く走れなかったし、相手の馬は遅くなることがなかったからである。槍先とクマン人の背の間は、人の腕ほどの距離だった。そこで聖ラースロー公は娘に向かってこう叫んだ。「美しき妹よ。クマン人の帯をつかみ、地面に身を投げだしなさい。」娘はその通りにした。聖ラースロー公は地上に横たわったクマン人を殺そうと思い、遠くから〔馬上から－筆者[18]〕槍で突き刺そうとした。そのとき娘は、殺さないで放免してと懇願した。それゆえ女性には信仰心がないことがわかる。おそらく淫らな愛情から、クマン人を解放したかったのである。そのあと聖公は男と長い間格闘し、腱を切り殺した。しかし娘は司教の娘ではなかった。〔シャラモン〕王と栄光ある公たち〔ゲーザとラースローの兄弟〕はほとんどの異教徒を殺し、囚われていたキリスト教徒を皆、解放し、幸福な全ハンガリー軍とともに、勝利を喜びながら帰還した。…（*Chronica de Gestis Hungarorum e Codice Picto Saec. xiv.*: 196–198）

一読して壁画との違いに気づく。まず、娘はラースローに対しクマン人の命を救ってほしいと乞うている。次に、ラースロー自身がクマン人の（アキレス）腱を切ったことで格闘の決着がついた。確かに『彩飾年代記』の挿絵でも、ラースローとクマン人の格闘の傍らに立つ娘（冠をかぶっている）は立ち尽くすのみで何もしていない。娘がクマン人の命乞いをし、決闘に介入しないという点は『彩飾年代記』の特徴である。誘拐婚のパターンで言えば 2-1 であり、娘は誘拐婚に同意しており、かつ誘拐者を最後まで救おうとした。ただし娘かその後どうなったのかはわからない。

ラースローは司教の娘だと思い救おうとしたこと、娘の手を借りずクマン人の脚を切り勝利したことなど[19]、聖性と騎士性を際立たせようと

する筋立てになっていると言えよう。なお司教の娘でないことがわかったと記述しているのは、14 世紀にはすでに聖職者の妻帯が明確に禁止されていたからであろう。おそらくこの記述の元となった口承はもっと古い時期に起源を持つことがわかる。

２－２　ミュゲルン年代記の記述

次に見る叙述史料は、神聖ローマ皇帝カール 4 世（在位 1346–1378）の宮廷詩人ハインリヒ・フォン・ミュゲルン Heinrich von Mügeln の『年代記』Chronicon である。この詩人はハンガリー国王ラヨシュ 1 世の宮廷を訪れ、1346 年から 1353 年まで滞在したあと、1360 年頃にドイツ語で書いたハンガリー史がこの作品である（*Korai Magyar történei lexikon*: 470）。

> 同じ日、ラースロー公は、異教徒がとても美しい娘を一人、自分の後ろに乗せて馬で逃げるのを見た。急いで栗毛〔の馬〕に乗ったが追いつけない。そこで聖ラースローは娘に大声で言った。「異教徒の帯をつかんで、一緒に地へ落ちなさい。」娘はそうした。聖ラースロー公は地に倒れた異教徒に傷を負わせ、次に殺そうとした。そのとき異教徒は起き上がり、長い間、聖ラースローと格闘した。なかなか勝負がつかなかったので娘は手斧で異教徒の脚を切り、異教徒は倒れた。ラースローが異教徒の髪をつかみ、娘が首を切り落とした。こうして〔シャラモン〕王と公は捕まった娘を助け、喜び家に帰った。…（Lukács 1980: 165）

この内容は、壁画に描かれた筋とおおよそ一致している。各地の壁画を見て記したのか、あるいは『彩飾年代記』とは異なる別の記述や口承を参考にしたのか、いずれにせよ娘がラースローに協力し、クマン人の脚を切って決着をつけることが記述されている。娘が同意していなかった［誘拐婚 1］もしくは当初同意していたが、途中から翻意した［誘拐婚 2-1］のパターンである。

２－３　『ハンガリー・アンジュー家聖人伝』の図と記述

次は上記の年代記、歴史書とは性格が異なる史料、絵画による聖人伝集成とも言える『ハンガリー・アンジュー家聖人伝』である。多数の聖人の伝説を集めたもので、各ページに 4 枚の図が描かれ、各図の上か下に短文の説明がついている。1333 年前後に、国王カーロイ 1 世が息子アンドラーシュのためにイタリアかハンガリーで作らせたと考えられている（Marosi 1973: 37, ）。絵画にはイタリアの影響が強いとされる。この聖人伝集成にはハンガリー関係の地方聖人もとりあげられているが、なかでも聖ラースローに多くの紙幅を割いていることは、アンジュー家宮廷で聖ラースロー崇敬が強かったことを示している。ラースローが敬虔な王であったこと、死後に王の墓で奇蹟がおきたことが描かれているが、ラースロー列聖直後に書かれた二つの聖人伝とは異なり、聖ラースロー物語もとり上げている（*Magyar Anjou legendárium* : 133-138, *Magyarországi művészet*: 207）[20]。

ラースローはタタール人と戦い【図 2-1 右上】、鎚矛で打たれ負傷、【図 2-1 左下】、ラースローが敵の髪をつかみ、娘が敵の脚を切り【図 2-1 右下】、ラースローが敵の髪を引っ張り、娘が敵の首を切り【図 2-1 左上】、ラースローは娘に抱かれ【図 2-1 右上】、娘／聖母がラースローの傷を癒し【図 2-1 左下】、ラースローは宙に浮いていく【図 2-1 右下】。

壁画や他の叙述史料と異なり、娘が攫われたことを表す場面がないため、突然娘が現れたかのような印象を与える。しかしそれ以上に独特なのは、娘が実は聖母マリアであったということである。ラースローが異教徒から守った対象は、単なるキリスト教徒の娘ではなく聖母マリアであり、つまりはキリスト教そのものであったとも解釈できる。さらに言えば、ラースローとキリストが重ねあわされてもおり、聖人伝ゆえに、壁画よりずっとキリスト教色が強い。

ところで理想的な騎士としてのラースローが、娘の助けを得なければ勝利できないというのは、騎士に相応しくない話である（Lukács 1980: 172）。しかし娘が聖母であれば、聖母がラースローを助ける展開となり、ラースローが聖母に守られた聖人であることが示されて問題はない。あ

るいは聖ラースローが聖母マリアと協力して異教徒を倒すというのは、キリスト教的な話として聖人伝に相応しい。あるいは騎士聖人の物語としても、より洗練されたものとなりうる。

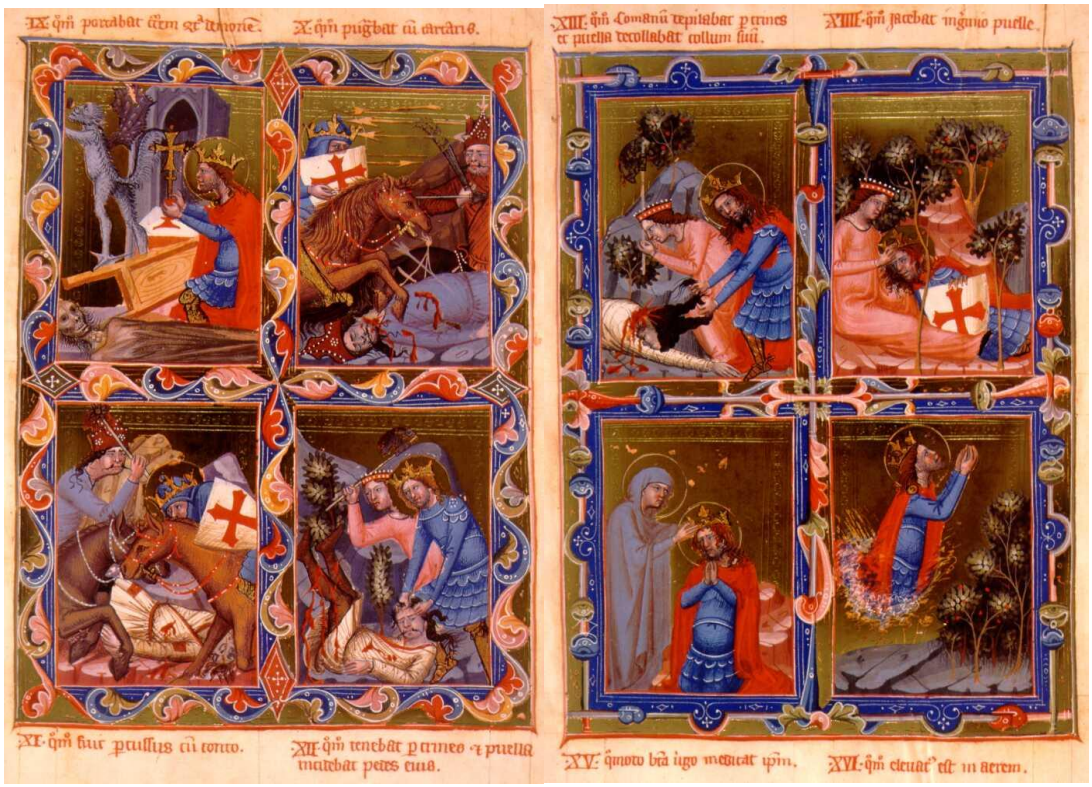

図 2-1（左）図 2-2（右）『ハンガリーアンジュー家聖人伝』
出典：Országos Széchenyi Könyvtár ホームページ

聖ラースロー物語に聖母が関わっているのはこの聖人伝のみと考えられていたが、2007 年にヤーノーがセーケイ地方[21]の壁画に、聖母が描かれていた可能性を指摘した（Jánó 2007）。この点には、下でもう一度言及する。

２－４　ボンフィニ『ハンガリー人の歴史』の記述

ここで注目したいのが、15 世紀後半にハンガリーの国王宮廷に招かれたイタリア人の人文主義者、ボンフィニが著した『ハンガリー人の歴史』である。当時の国王マーチャーシュ（在位 1458–1490 年）は、アルプス

以北で最も早くルネサンス文化を宮廷に取り入れた国王で、とりわけその図書室の充実ぶりはイタリアでもよく知られていた。ボンフィニはマーチャーシュ王に依頼されてハンガリー王国の歴史を編纂した。その中のケルレーシュの戦いの部分である。

騎馬兵が娘を一人、馬に乗せているのに気づいたラースローは、その無垢の娘の守護者であるかのように、直ちに後を追った。敵は逃げラースローは全力で追ったが、傷を負っていたため娘を攫ったクマン人を捕まえることができない。この上なく美しき娘に大声で言った。「敵と一緒に馬から落ちよ」と。ラースローがヴァーラド司教の子と勘違いしたその娘は、言われた通りにした。英雄の心をもった将は、クマン人が馬から落ちるのを見たが、馬上から敵を討つのは、とりわけ一騎討ちにおいては恥ずべきことと感じたので、ただちに馬から降りて、クマン人に襲いかかり斧で殺した。ある者たちが言うには、娘はラースローと組み合っているクマン人に、手にした斧を後ろから打ち下ろし、救い人に協力した。それに対し、別の者たちが記しているところによると、娘は敵の命乞いをした。…（Bonfini 1995: 294）

「クマン人に襲いかかり斧で殺した」までの部分は、『彩飾年代記』の記述とかなり共通する。［誘拐婚 1］である点で、多くの壁画や『アンジュー家聖人伝』の内容とは異なる。ラースローが娘の手を借りずにクマン人を殺害したことと、クマン人を馬上から殺さなかったことと合わせて、ラースローの騎士としての徳を称揚する筋であると言える。
しかし興味深いことにボンフィニは、クマン人を討つのに娘がラースローに協力したという、多くの壁画と同じ内容の話を言う者たちがいる一方で、娘がクマン人の命を救うようラースローに乞うたという『彩飾年代記』の記述を思わせるような文章が、別の者たちによって記されていると付記していることである。

ボンフィニがハンガリーにやってきた 15 世紀後半にも、口承、記述を合わせ、複数のヴァリエーションがあったことが伺われる。ボンフィニ

がハンガリー史を書く際には、当然それまでに書かれたさまざまな年代記、歴史書や聖人伝、さらには文書の類などにも目を通したはずであり、『彩飾年代記』の記述や『アンジュー家聖人伝』の内容を知っていたと考えてよいであろう。またボンフィニの記述からは、15 世紀後半の国王宮廷やその周辺にいる人々の間でも、壁画と同様の筋書きが語られていた可能性が大きいと言えよう。

ここでもう一つの図像を見てみたい。上記トゥローツィ年代記の第 2 版（1488 年 6 月、アウクスブルク版[22]）巻頭ページの木版画である。一枚の絵の中に、追跡の場面と、素手での格闘の場面とを描いている。後者の場面では娘が斧で族長の脚を切ろうとしている。つまりこの挿絵は［誘拐婚 1］であり、同年代記の、娘が族長の命乞いをしたという文章、すなわち『彩飾年代記』からそのまま取り込んだ記述内容と一致していない。

３　壁画以外の史資料と、壁画の間の相違

ここまで壁画と、壁画以外の史資料を見てきた。ここで他の史資料にはない、壁画だけの特徴を確認しておきたい。壁画以外の史資料がおもに国王宮廷の意向により制作されたのに対し、壁画が地方社会のなかで生まれたことによるところが大きい。

多くの壁画では合戦ないし追跡場面で、ラースローの槍はクマン人に届いている。それどころかクマン人の身体を貫通し、槍先が反対側に出ていることもある。あるいはクマン人が流血している例も多い[23]。他方、ラースローもクマン人の矢を受けても傷つくこともなく追跡を続ける。つまり両者は超自然的な力を持ったふじみ野存在である。しかし叙述史料にはそのような記述はない。『彩色年代記』でもミュゲルンの年代記でも、ラースローは槍を突き刺すどころか、クマン人に追いつけないため、娘にクマン人を引きずり下ろすよう求めている。ミュゲルンの年代記は大筋では壁画にかなり近いが、壁画との間にこの点では違いがある。これはやはり地方で制作され、口承からの影響が強い壁画と、宮廷社会で生まれた叙述との違いによるものと考えられる。

壁画ではラースローもクマン人も不死身であるゆえに、決闘は容易に決着がつかず、長引く[24]。その結果、娘が介入して決着をつけるのであるが、このような勇者どうしの決闘の例は洋の東西を問わず見られることが、多くの先行研究で指摘されてきた。ただし、娘の介入、つまり第三者が格闘している勇者の一方のアキレス腱ないし脚を切って決着がつくと図像は、西欧には見られないという（Vízkeleti 1981: 273）。東方の類似の図像にも見当たらない。あるいは東方の類似の叙事詩などにも出てこない（Sashalmi-Fekete 2020: 37–41）。戦いへの娘に介入については、第4章第4節で再び言及することとする。

４　聖ラースロー物語普及の背景

第4章では、聖ラースロー物語普及の背景を、国王宮廷の聖ラースロー崇敬、大貴族による地方での壁画制作依頼、中小貴族たちの自意識と聖ラースロー壁画の関係、民衆による壁画の見方という4点から考察する。

４－１　国王宮廷による聖ラースロー崇敬の普及、利用

国王宮廷が特に聖ラースロー物語の普及をも意図していたかどうかはわからないが、14 世紀から 15 世紀にかけて聖ラースロー崇敬を支持し広めようとしていたことは間違いない。

13 世紀末にハンガリー土着の王家アールパード家の男性成員が途絶えると、女系によりアールパード家とつながりがあったナポリ王家のアンジュー家がハンガリー王位を得た。ナポリから来たカーロイ 1 世（在位 1308－1342 年）とその息子ラヨシュ 1 世（在位 1342－1382 年）は、王位継承の正統性を強調すべくアンジュー家とアールパード家とのつながりを示そうとした。そのための有効な手段の一つがアールパード家の聖王たちのイメージの利用である。とりわけラヨシュ 1 世は自ら騎士王であることを強調し、ラースロー1 世と自分のイメージとを重ね合わせ、王国内に広まっていた聖ラースロー崇敬をいっそう広めようとした（Klaniczay 2000: 284, Bertényi 1996: 986–988.）。

アールパード家からはそれまで 4 名が列聖されていた[25]。他方アンジュー家もフランスで聖王ルイを生んだ家系であったため、聖性を帯びた家系という共通点があり、王位継承性の正統性は受け入れられやすかったのではないか。その意味でも聖人崇敬の利用は有効だったのであろう。

宮廷で制作された『ハンガリー・アンジュー家聖人伝』や『彩飾年代記』は、多数の人の目に触れるものではないが、上で見たようにボンフィニの記述から、聖ラースロー物語のいくつかのヴァージョンが宮廷でも知られており、おそらく聖ラースロー物語の口承も伝わっていたのであろう。宮廷で広まっていた物語と、地方で人々が目にした壁画の物語は、いくつかのヴァリエーションこそあれ、基本的には同じ物語であり、その意味では宮廷と地方との間につながりがあったと言える。

アンジュー家の国王が 14 世紀に聖ラースローとのつながりを強調した例としては、以下の点を挙げることができる。まずラヨシュ 1 世は即位後に、聖ラースローが埋葬され崇敬の中心地であり巡礼地でもあったヴァーラドに参拝した（Bak 1973: 23）。またラヨシュ王の金貨は、表側にハンガリー・アンジュー家の紋章とラヨシュ王の銘、裏面には聖ラースローの立像と銘が刻まれた（Kubinyi 1999: 336, Bertényi 1996: 987.）。「異教徒ボスニア人」に対し遠征を行ってカトリックを広めようとしたラヨシュ 1 世は（Bak 1982: 6）、聖ラースローと同様、キリスト教を守る騎士王としてのイメージを打ち出そうとしていたと考えられる。ラヨシュ治世後半には東南方面から、オスマン帝国の軍勢が初めてハンガリー王国に侵入するという事件もあり、異教徒と戦う強い国王が望まれていた。実際、教皇インノケンティウス 6 世は 1356 年の書簡のなかでラヨシュ王をキリストの拳闘士 pugil Christi、主の勇者 athleta Domini、キリスト教信仰の騎士 miles fidei Christiane と呼んだ（Terbe 1936: 307）[27]。

その後、1387 年に即位したルクセンブルク家のジグモンド（在位 1387-1437、神聖ローマ皇帝としてはジギスムント在位 1411-1437）の治世にも、国王宮廷において聖ラースロー崇敬が維持された（Klaniczay 2000: 300–301）。ラヨシュ 1 世の娘マーリアと結婚したルクセンブルク家のジギスムントは、1387 年ハンガリー国王に即位（ジグモンド王）するが、

ジグモンド王はアールパード家とのつながりがなかった。さらにジグモンドと対立関係にあった前国王であるナポリ・アンジュー家のカーロイ 2 世（在位 1385–1386、ナポリ王としてはカルロ 3 世　在位 1381–1386）もまた、ハンガリー王国内に広まっていたラースロー崇敬を利用していた。そのため、ジグモンド王は、いっそう意図的に聖ラースロー崇敬を利用して、自らの王位の正統性を強める必要があった[28]。1396 年にニコポリスの戦いでオスマン軍に敗れたこともあり、異教徒と戦う王として聖ラースローのイメージを必要とした（Kerny 2010: 260）。

15 世紀後半のマーチャーシュ王も、引き続き聖ラースロー崇敬を自らの統治に利用した。1468 年以降に作られた金貨では、裏側に聖ラースロー像を刻み、表側には聖母像とマーチャーシュ王の名を刻んだ。これは、マーチャーシュ王が聖母と聖ラースローの保護の下に王国を統治することを表している（Kubinyi 1999: 336, Kerni 2008: 397）。

他方、マーチャーシュ王は、自分が天使によって戴冠される図をしばしば描かせた。たとえば 1460 年代後半に作製させた典礼書の挿入画に、イエスの苦難の図いわゆる「悲しみの人 Vir Dororum」があるが、イエスの前に跪き祈りを捧げるマーチャーシュ王の頭上で一人の天使が剣を保持し、もう一人の天使が王に聖王冠をかぶせている。あるいは現ドイツの都市バウツェンのオルテンブルク城の門塔、いわゆるマーチャーシュ塔 Matthiastrum にあるマーチャーシュ王のレリーフでも、頭上で二人の天使が聖王冠と剣を持っている。

これらの図像には、聖ラースローに特徴的なトポスが描き込まれている。一つは天使による戴冠であり、神によって王となるべく選ばれたことを示す。たとえばヴィトファルヴァ Vitfalva 教会（現スロヴァキア）の聖ラースロー物語の壁画では、王が娘の膝枕で休む場面で、王の上方で二人の天使が王冠を支えもっている様子が描かれている。

もう一つは頭上で天使が剣を持つ構図である。神により守られていることを示す。聖ラースロー伝説の一つによると、ラースローと敵対していたシャラモン王が、戦いの前に、ラースローの頭上に燃え盛る剣を持った天使がいるのを見て、ラースローが神に守られていることを知って

恐れ、城内に引きこもったという（Klaniczay 2000: 158）。このようにマーチャーシュ王は自身を聖ラースローの再来あるいは後継者であるように演出しようとしていた。これは外敵、オスマン軍に対抗できる国王であることを強調するためであったと考えられる（拙稿 2015: 38–41）。

４－２　有力な貴族たちが聖ラースロー物語を地方に広める

崇敬が広まる上で、壁画が宮廷とは無関係な大勢の人々の目に触れたことが大きく与ったはずである。実際に各地に壁画を広めたのは、壁画の制作を画家たちに注文した依頼主である。依頼主ないしその家系が特定されている壁画は多くない。また特定されているのは、これまでのところ大貴族が多い。国王宮廷との直接的なつながりがあり、王国や宮廷の高位官職を保有していた貴族たちである。しかし地方貴族のなかでも比較的裕福で有力な貴族も依頼した可能性は十分にある。

まず、壁画の実際の依頼主ではないが、14 世紀中頃に、トランシルヴァニアのセーケイ地方に聖ラースロー信仰を広め、壁画の普及に影響を及ぼしたと考えられている大貴族がいる。14 世紀半ば（1343–1350）にセーケイ長官であったラツクフィ･アンドラーシュ Lackfi András である。彼は後にトランシルヴァニア侯にもなった大貴族である（Engel 1996: 139）。1345 年にラヨシュ 1 世からキプチャク・ハン国に遠征するよう命じられたラツクフィは、セーケイ人らを率いてモルドヴァ地方に攻め込み、大量の略奪品を奪って帰還した。セーケイ地方の壁画を研究しているヤーノーは、異教徒との戦いを指揮したラツクフィ・アンドラーシュが、14 世紀に聖ラースロー信仰をセーケイ人の間に広めたのではないかと推測している。また、下で見るように、セーケイ人の間では聖ラースローと聖母マリアが異教徒との戦いを勝利に導くと信じられていて、それが、14 世紀中頃に制作されたセーケイ地方のブグズとマクシャの聖ラースロー物語にも表現されていると主張している（Jánó 2017: 58–61）。

次に、依頼主が特定されている、あるいは推定されている壁画を時代順に見ていこう。

1300 年頃または 1317 年に制作されたカカシュロムニツ Kakaslomnic

（現スロヴァキア）の壁画は、ラートート家門のカザイ・カカシュ Rátót nembeli Kazai Kakas が依頼主であると考えられている。カザイ・カカシュは 14 世紀初頭に国王宮廷の主馬長官を務めた有力な貴族であった[29] (Klaniczay 2000: 300、Lálszló 1993: 109)。

1350～60 年頃に制作されたリマバーニャ Rimabánya（現スロヴァキア）の依頼主は、トランシルヴァニア侯のセーチェーニ・タマーシュ Szécsényi Tamás であった(Prokopp 2017: 63）[30]。

ジグモンド治世にも聖ラースロー物語は次々に各地の教会の壁を飾ることとなった。現在、この時期に作られたことがわかっている壁画は 14 ある（Kerny 2010: 261）。ジグモンド治世初期のものとしては、たとえば 1389 年に制作された上述のバーントルニャを挙げることができる。これはバーンフィ・ラースローBánfi László が作らせたものであることが明らかにされている。彼自身は高位にはつかなかったが、高位官職保有貴族を輩出した家系の貴族である（Bogyay 1986: 148-154）。

同じ 14 世紀末頃に制作された、やはり上述のグムルラーコシの依頼主はベベク・ラースロー (Pelsőci) Bebek László である（Klaniczay 2000: 301, Kerny 1987:358)。この人物は、各地の県令を歴任したほか、王妃宮廷の大蔵長官なども務めた貴族である（Engel 1996: 27）。ベベク家はこのほかにも複数の教会にさまざまな壁画を描かせている(Kerny 1987: 362 n.69, Kerny 2010: 264)。

次は 1400 年前後 31 に制作されたカラスコーKaraszkó（現スロヴァキア）である。トランシルヴァニア侯や王国裁判官を歴任した最有力貴族の一人セーチェーニ・フランク Szécsényi Frank が作らせたものである。ケルニは壁画の中で、聖ラースローの左手側から聖ラースローを見ている騎士が依頼主を描いたものと想定している【図 3】（Kerny 2010: 263, Prokopp 2017: 63, Engel 1996: 221）。

最後はセーケイデルジュ Székelyderzs（現ルーマニア）である。壁画は 1419 年に完成した（Jánó 2017: 56）。教会の壁画に寄贈主の名前がはっきり書かれている。ナジミハイ家のウンギ・パール (Nagymihályi) Ungi István (Bodrog alispán) fia Pál である。彼自身は父親イシュトヴァーン同

様、ボドログ県の副県令を務めたことがある(Kerny 1987: 358, Kerny 2010: 264)[32]。

図 3　カラスコー壁画（合戦・追跡の場面）
出典：Wikimedia Commons, File:Kraskovo church - Saint Ladislaus legend mural (detail).jpg

ここまで見たジグモンド治世に描かれた壁画は、高位官職保有貴族あるいはそれに準じるような立場の貴族により制作された。国王宮廷に見られた聖ラースロー崇敬が、国王宮廷とつながりが強い貴族らにより、地方に広められた。彼らは国王宮廷で知られていた聖ラースロー物語を、自分の所領にある教会に描かせることで、自分と国王宮廷とのつながり、そして地方の中小貴族やおそらく都市民[33]や民衆の間にも広まっていた聖ラースロー崇敬と自分のつながりを示し、自らの権威を高めようとしたのだと考えられる。上で見たカラスコーの教会のように、聖ラースロー物語の壁画の中に、あるいは同じ教会内の別の場所に、依頼主自身が描かれている例も知られている。

４－３　中小貴族たちの聖ラースロー崇敬と物語の関係

では次に、聖ラースロー物語を口承で聞いたり、壁画で見た人々が、何を読み取り、何を感じたのかについて考察してみたい。しかしこれについては、13 世紀における時代状況に関するクラニツァイの推論（Klaniczay 2014: 34–35）と、セーケイ地方に関するシャシハルミ=フェケテの推論（Sashalmi-Fekete 2020: 30–35）などがあるが、先行研究での言及は少ない。ここでは特に、依頼主と近い関係にあったであろう地方の中小貴族の、15 世紀の状況から考察を加える。

上で見たようにハンガリー国王はしばしばローマ教皇などから、キリスト教世界を異教徒から守る「キリストの勇者」などと呼ばれたが（Terbe 1936: 307）、15 世紀からはハンガリー国王を「キリスト教信仰の盾、防壁」とする比喩も用いられるようになった（Terbe 1936: 303–304）。他方、15 世紀半ば頃から国王個人ではなく、ハンガリー王国がキリスト教世界を守る防壁であるとする常套句が見られるようになり、それまで国王のみに帰せられていた西方キリスト教世界を守る使命を、貴族たちが自分たちの使命として引き受けるようになった。

ハンガリー王国を防壁に譬えた最初の例は、1440 年にポーランド国王ヴワディスワフ 3 世がハンガリー国王に選出[34]された際に発出された文書で、ハンガリーとポーランド両国は、異教徒からキリスト教信仰を守る石壁、盾であると表現した[35]。その後おもにローマ教皇庁により、ハンガリー防壁論が西方キリスト教世界各地に広められた。特に後にローマ教皇ピウス 2 世となる人文主義者ピッコローミニ（教皇在位 1458–1464）が、積極的にハンガリー防壁論を唱えたことで知られている。

ハンガリー防壁論はしだいにハンガリー国内でも普及し、ハンガリー人の自己意識に投影され、ハンガリー人の行動にも一定の影響を与えるようになった。マーチャーシュ王自身、ハンガリー王国をキリスト教世界の盾、防壁と呼んだ（Terbe 1936: 300）。

また 1505 年の議会で、ハンガリーの大貴族、中小貴族、高位聖職者たちは、ハンガリーを「キリスト教の稜堡、盾として、自らを犠牲にしてキリスト教を守ってきた国」であると述べた（Benda 1937: 33, Bak 1973:

158–159.）[36]。ハンガリー貴族たちの間でも防壁の常套句や、キリスト教世界を守る使命感が広まっていたことの現れである。これは自らの血を流すことで祖国とキリスト教世界を守ってきたという自負の現れでもある。このような使命感からオスマン軍との戦いで命を失うことは殉教であり恐れることではないという意識も生まれた。たとえば 1448 年にコソヴォの戦いを前にしたハンガリー軍の総大将フニャディ・ヤーノシュ Hunyadi János は、兵士たちに向かって、オスマン軍をヨーロッパから追い出すか、さもなければキリストのために戦死し、殉教者の冠を戴くかどちらかだと述べたという（Hopp 1992 :22）。

このような意識、使命感をもちつつ、キリスト教の戦士と呼ばれた国王の下で異教徒と戦っていた 15 世紀のハンガリー貴族にとって、聖ラースロー物語の壁画は、自分たちが仕えている大貴族や国王の活躍、あるいはむしろ自分たちの活躍を表現するものとして歓迎されたのではないだろうか。

ところで冒頭で紹介したように、13 世紀の典礼テクストでは聖ラースローを「キリスト教騎士の柱」、「祖国の勇者」などと呼んだ。先行研究ではこの文言をつかって、聖ラースローのイメージは、15 世紀頃からしだいに、キリスト教を守る騎士聖人から、祖国つまりハンガリー王国を守る騎士聖人に変化していったという見解が一般的である。確かに聖ラースローの図像にハンガリー王国を象徴するものが描き込まれるようになった。たとえばラースローの盾に描かれた十字架が、二重十字架へと変化したことなどである（Kerny 2010: 262, Marosi 1995:82）。

しかし、キリスト教を守る騎士聖人と、王国の守護聖人は、相互に排他的ではない。上で見たように、ハンガリー王国が「キリスト教の防壁」と呼ばれ、貴族たちもキリスト教世界を守ることが自分たちの使命だとみなすようになったとき、祖国を守ることは、キリスト教世界を守ることと同じであったはずである。とするならば、キリスト教世界を守る戦士、勇者という聖ラースローのイメージも、引き続き生き続けたと見た方がよい。

もちろん聖ラースローはハンガリー貴族たちを守ってくれる「祖国の

勇者」であり、聖ラースローが外敵と戦う自分たちを守ってくれると貴族は信じていた。たえとば、聖ラースロー崇敬の中心地であるヴァーラドで、1479 年に書かれた年代記『ドゥブニツ年代記』には、上で見た 1345 年のラツクフィ・アンドラーシュが率いたワラキア遠征について、次のような記述がある（Klaniczay 2000: 165–166, Jánó 2007: 419）。

> ハンガリー人が加わったセーケイ人の軍勢が遠征していた三日間、ヴァーラド教会におかれていた聖ラースローの骨を収めた胸像〔聖遺物ケース〕が消えていた。胸像は 4 日目には元の場所に戻っていたが汗を流していた。捕虜となったモンゴル兵が言うには、モンゴル兵を討ち破ったのは、セーケイ人やハンガリー人ではなく、彼らがいつも助けを求める聖ラースローだった。他のモンゴル兵たちもハンガリー軍の先頭には黄金の王冠を戴く巨躯の騎士が手に戦斧を持ち、モンゴル兵をなぎ倒していったと言う。また騎士の頭上にはやはり黄金の冠を戴く光輝に包まれた美しい女性がいたという。セーケイ人がキリスト教のために異教徒と戦うときには、聖母マリアと聖ラースローがセーケイ人を助けてくれることは明らかである。

この記述によれば、ワラキア遠征が行われた 14 世紀半ば、あるいはこの年代記が書かれた 15 世紀半ばに、セーケイ人の間には、異教徒との戦いの場で、聖ラースローが聖母マリアとともに、自分たちを導き守ってくれるという信仰があったことになる。

第 2 章の【例外 4】で述べたように、ヤーノーは 14 世紀中頃に制作されたブグズとマクシャの壁画に描かれている、空中に漂う掛け布のようなものは、聖母マリアの服装ではないかと推測している。聖ラースローもクマン人も布の方を見上げるように見ていたり、クマン人が布の方に矢を射ようとしていることを考え合わせて、ヤーノーはそのような結論に至った。この結論は上記『ドゥブニツ年代記』の記述内容とぴったり符合しており、十分にありうるものと言えよう。（Jánó 2007: 417–421）。

ヤーノーも指摘しているように（Jánó 2007: 420）、聖ラースロー物語で

聖母を描いたのは 14 世紀前半に国王宮廷で制作された『ハンガリー・アンジュー家聖人伝』である。ヤーノーの見立てが正しいとすると、宮廷の聖ラースロー物語が、地方で制作された壁画に影響を与えた、あるいは共鳴しあっていたと言えよう。

壁画に描かれていることは、ハンガリーの貴族たちが抱いていた使命感や、聖ラースローおよび聖母マリアに対する崇敬を表現してい（るように見え）た。つまり地方の貴族たちにとっては、壁画は、いわば自分たちのアイデンティティーを確認できるようなものだったのではないだろうか。そえゆえにこそ、王国各地で 200 年以上にわたり、とりわけオスマン軍との戦いが激しくなるなかで描かれ続けたのではないだろうか。

16 世紀初頭にいたっても依然としてハンガリーの戦士たちは、ヴァーラドの聖ラースロー騎馬像がオスマン軍との戦いで自分たちを守っていると信じ、戦場では「聖ラースロー！」と叫んでいたらしいことをクラニツァイが紹介している（Klaniczay 2014: 39）。

４－４　民衆は壁画から何を感じとったか。

民衆が壁画を見て何を思ったのかについては、地方貴族の場合以上に手がかりが乏しい。第 2 章の【例外 2】で見たように、実際に外敵が侵入して被害にあったことがある王国辺境地域の村などでは、国王や貴族たちが自分たちを守ってくれることを期待して壁画を見ていたということは十分に考えられる。

それ以外では、口承世界から聖ラースロー物語のなかに入ったと考えられる要素がヒントになるかもしれない。壁画に描き出されている不死身の勇者間の決闘という点と、決闘への娘の介入、つまり娘がクマン人のアキレス腱ないし脚を切るという点である。

壁画で聖ラースローを象徴する色は基本的に白であり、悪魔である異教徒を象徴する色は黒ないし暗色である。鎧や服、あるいは馬の色もほとんどの場合、このような白－黒、明色－暗色の対照をなしている。トゥローツィ年代記の挿絵でも、ラースローの白馬がつながれている木は青々と葉が繁り生命力を象徴しているのに対し、族長の黒馬がつながれ

ている木には葉が一枚もない。このような明－暗あるいは善－悪の対比は、洋の東西を問わず見られるが、そこにおさまりきらないのが、娘がクマン人のアキレス腱を切る動きである。

ラースロー・ジュラによると、不死身の勇者間の決闘と類似した話が、ハンガリーおよびユーラシア遊牧民の口承の中にある。白い牛に姿を変えたシャーマン（ハンガリー語ではタールトシュ táltos）が、黒い牛になったシャーマンと格闘したが、なかなか決着がつかない。そこで白い牛が、黒い牛のアキレス腱を切るよう、人間に手助けを求めるという話である（László 1993: 33–34）。娘の介入は、このようなシャーマン信仰の世界を連想させる。

確かに壁画や写本の挿絵を描いた画家たちは、基本的にはキリスト教世界で知られていた図像を参考にして、聖ラースロー物語を表現しようとしたと見るのが妥当であろう。たとえばマロシは壁画の様々な見本、例はイタリアにあったと述べている（Marosi 1973: 37）。また壁画を描いた画家たちのなかには外国出身の者もいた。

しかし壁画は、国王宮廷の騎士的な文化を表現するだけでなく、地方の人々の口承世界とも結びついていた。14～15 世紀の民衆が、超自然的な力を持つように描かれた聖ラースローとクマン人の決闘を見て、黒いシャーマンと決闘する白いシャーマンを連想した可能性は一概に否定できない[36]。教会壁画を見た人々が、依頼主や画家たちが表現しようとしたところ（のみ）を見てとったとは限らない。自分たちに身近な歌謡（誘拐婚）や俗信の世界（シャーマニズム的な世界観）に通じるものを感じ取ったかもしれない。もしそうであれば、それもまた壁画が人気を得て普及した背景であったと言えよう。

５　結びに変えて

ここまで聖ラースロー物語を、筆者なりの解釈を含めて紹介し、物語普及の背景を 4 点に分けて考察してきた。その内容を繰り返すことはしないが、結びに変えて、やや大胆な仮説を提示してみたい。

上の第 4 章第 1 節では、国王宮廷における聖ラースロー崇敬の普及、

利用について見たが、13 世紀後半に国王宮廷が崇敬一般ではなく、口承世界の聖ラースロー物語を受け入れて、それを意図して広めようとしていた可能性があるという仮説である。

13 世紀後半でラースローという名の国王は、ラースロー4 世（在位 1271–1290）のみである。あだ名は「クマン王」である。父はイシュトヴァーン 5 世（在位 1270–1272）で、母はクマン人族長の娘エルジェーベトであった[37]。異教徒であるクマン人が王国内に多数いることが問題となるなかで、ハンガリーに調査に派遣された教皇特使が、ラースロー4 世は異教徒クマン人を保護しているとして 1279 年に破門した。しかしその後もラースロー4 世は国王として何とか王国の秩序を維持しようと努力しつづけた。それに対し一部のクマン人が反旗を翻したため、王はこれをホードの戦い（1280 年または 1280 年）において打ち破った。王は 1286 年に議会を開くなど、その後も秩序回復を目指したが、国王とエステルゴム大司教の間の対立が続き、かつ国王の権威が大きく揺らいだ状況下ではうまく進まなかった。

教皇庁や国内の高位聖職者から異教徒とのつながりを非難されながら、王国の秩序を立て直そうしていたラースロー4 世の宮廷では、さまざまな方法で国王としての適格性を訴えて、教皇庁などの理解を得ようとしたことが推測される。実際ラースロー4 世はホードの戦いで、王に従わないクマン人を成敗した。この戦いは聖ラースロー物語に描かれたことと重なるのではないだろうか。キリスト教国王としてのラースロー4 世の評判を高めるために、国王宮廷が意図的に物語を広めようとした可能性もある。これに関してルカーチは、親クマン人の傾向があったラースロー4 世とその宮廷が、クマン人を倒す聖ラースローの物語を受け入れたり利用したりしたとは考えられないと述べているが（Lukács 1980: 176–177）、国王自身はともかく、国王に仕えていた宮廷の人々が皆、親クマン人的だったとは限らない。

ラースロー4 世の宮廷に仕えた聖職者であったケーザイ・シモン Kézai Simon は、著書『ゲスタ・フンガロールム』で、フン人・ハンガリー人同族説に基づいてハンガリー人の歴史を著したが、この歴史書執筆の目

的の一つは、ラースロー4 世の統治の正統性を主張することにあった可能性がある。ケーザイの書が実際に教皇の目に止まったかどうかはわからないが、同書はイタリアに送られたことが知られている（Veszprémy 1999: 157–158）。ケーザイは、ラースロー4 世が教会に仕える「聖なる教会の息子」であることや、ホードの戦いでクマン人を討ったこと、あるいは 1278 年マルヒフェルトの戦いで、ドイツ王に加勢してチェコ王オタカルに勝利した活躍などを書いている（*Gesta:* 148–154）。

確かに、最終的には国王宮廷の努力は実らず、王は宮廷を出奔しクマン人とともに暮らすなかでクマン人に殺害されたのではあるが、ラースロー4 世の宮廷人たちが、聖ラースロー物語の普及に努めた可能性は検討してみる価値がある。

ところで、1453 年に作成された、ウィーン大学のハンガリー王国出身者名簿の冒頭に、聖ラースロー物語が装飾画として入っている。聖ラースローとクマン人が格闘し、娘が斧でクマン人の脚を切るという図柄である。ハンガリー王国の外でも聖ラースロー物語が、ハンガリー人を象徴するものとして使われるようになっていたことを示す例である。16 世紀以降の聖ラースロー崇敬、聖ラースロー物語の変遷については、別稿において検討しなければならない。

注

1 ベーラ 3 世の十字軍構想とラースロー列聖に関係あることをクラニツァイが考察している（Klaniczay 2000: 163）。

2 この二つの聖人伝、いわゆる『聖ラースロー大伝』と『聖ラースロー小伝』は内容がほぼ同じであり、列聖直前に書かれたはずである聖人伝に依拠して書かれたと考えられている。列聖直前の聖人伝は現存しない。以上について Szovák 2017: 41.

3 たとえば、王になる前に兄のゲーザとともに、シャラモン王と戦って勝利をおさめた戦いの前に、ラースローは天上からおりてきた天使が兄ゲーザに王冠をかぶせるのを見て、勝利を確信したことや、角に多数のろうそくを灯した鹿の

後を追って行って、ヴァーツ司教座聖堂を建てるべき場所を見つけたこと、ラースローの遺骸を載せた車がショモジの墓地に向かう途中、突然車が方向を変え、後に聖ラースロー崇敬の巡礼地となるヴァーラドに向かって進み出したことなどである（Klaniczay 2000: 157–158）。

4 なぜ騎士聖人としてのイメージが広まったのかについては、Klaniczay 2000: 164–166。

5 本稿では原則として地名はハンガリー語による地名のカタカナ表記とする。

6 20 世紀においても実際に誘拐婚が習俗としてあったことについては、*Magyar Néprajz* VII: 44–45. を参照せよ。なお、17 世紀に研究者に知られるようになった Molnár (Mónár) Anna ballada の筋は誘拐婚で、聖ラースロー物語との類似性がしばしば指摘される。

7 たとえば騎士が女性の助力がなければ敵を倒せないことは理想的な騎士像とは相容れない可能性など。この問題については下で言及する。

8 ラースロー・ジュラは東方起源を基本としながらも、他の要素が入っていることも認める。近年のコヴァーチによる研究は、ハンガリー人の古い英雄叙事詩が存在することを議論の前提としている。ユーラシアの遊牧民などの様々な神話などをもとにハンガリー人の古来の英雄叙事詩を再構成し、聖ラースロー物語はその英雄叙事詩を表現したものと主張しているが、古い英雄叙事詩が伝来した（はず）という議論の前提が証明できない。

9 壁画を描いた画家たちは実際、キリスト教世界のなかで活動し、そこで蓄積されてきたトポスや画像、たとえば聖ゲオルギウスの図像などを参考、手本にしてそれぞれの場面を描いた。なお 13～14 世紀のハンガリーでは聖ゲオルギウス崇敬も広まった（*Magyarországi művészetí*: 207）。なお一つの教会に聖ゲオルギウスと聖ラースローの壁画が描かれた例も知られている。

10 ここに、騎士が竜（悪魔）から娘を守る聖ゲオルギウス伝からの影響を見てとる研究者もいる。Klaniczay 2000,

11 異教徒が悪魔として描写されたことについては、原野・木俣 2009: 55–56 を参照。

12 Lukács 1980: 192.による。

13 László 1993: 155–156 では娘が登場しないことが指摘されているが考察はない。

髪を引っ張っている二人騎士を、総合的な研究を著したラースロー・ジュラは、ともに聖ラースローだと見なしているが、壁画があまり鮮明でないため、もう一人は別の騎士である可能性も残されている。

14 Lukács 1980: 189.による。

15 1383 年制作とするのが一般的だったが、Bogyay により 1389 年に訂正された。Bogyay 1986: 150, Kerny 2010: 263.

16 Lukács 1980: 196.による。

17 ラヨシュ 1 世の娘カタリンが生まれ、フランス王子シャルルと婚約が取り決められたのを機に、フランス宮廷に送るためにラヨシュ王が作らせたと考えられている(Prokopp 2017: 63)。

18 以下、〔　〕は筆者による補足である。

19 素手での格闘の最中に、相手のアキレス腱をどうやって切ったのかはわからない。

20 戦いの最初の場面（聖ラースロー10 番目の図）の説明では「どのようにタタール人と戦ったか」(quomodo pugnabat cum tartaris.) と記述しているが、斬首の場面では「どのように（聖ラースローが）クマン人の髪を引っ張り、娘がその首を切ったか」(quomodo Comanum depilabat per crines et puella decollabat collum suum.) と書いている

21 トランシルヴァニア地方で集団として特権を与えられていたセーケイ人が多く住んでいた地域。

22 第 1 版は同じ 1488 年 3 月にブリュンの印刷された（Kerny 2008: 399）。

23 Gelence, Kakaslomnic, Homoródszentmárton, Bibarcfalva, Szepesmindszent, Karaszkó など。他方、娘がクマン人を馬から引きずりおろす場面を描いた壁画は、Zsegra, Bántornya, Türje（Lángi, 2001: 82）の 3 カ所のみである。

24 『彩飾年代記』に、両者は「長い間」格闘したという記述はある。なおトゥローツィの年代記では「長い間」という言葉は省かれている。

25 1083 年にイシュトヴァーン 1 世とその王子イムレ、1092 年にラースロー1 世、1235 年にテューリンゲン方伯に嫁いだエルジェーベト（エリザベート）が列聖された。

26 これ以降、アルベルト 1 世、マーチャーシュ王、ウラースロー1 世など代々の

国王のほか、摂政フニャディ・ヤーノシュの金貨にもラースロー像が刻印された（Kubinyi 1999: 335）。

27 カーロイ 1 世もまた、モンゴル軍との戦いに勝利した後、教皇ヨハネス 22 世からキリストの拳闘士、信仰の勇者と呼ばれた（Terbe 1936: 307）

28 ジグモンド王も聖ラースローの墓に詣でるなどした対抗した（Marosi 1995: 82）。

29 制作年をクライニツァイは 1317 年、ラースローは 1300 年頃とする。

30 このほか、14 世紀前半に制作されたと考えられているテュレとオーチャの壁画は、ともにプレモントレ修道会の教会に描かれているが、依頼主が修道会なのか、その場所の領主なのか不明である。両教会については次を見よ。Lángi, 2001: 81–82, Klaniczay 2000: 301.

31 プロコップは 1390 年代(Prokopp 2017: 63)、ケルニは 1410–1420 年（Kerny 2010: 263）としている。

32 ナジミハイ家には高位官職保有貴族がいたことが知られている。Engel 1998: 30–39, 157–159.。

33 王国北部の都市ソモルノク Szomornok（現スロヴァキア）のある市民が 1421 年に作成した遺言状の中で、自分の死後に近くの村の教会に聖ラースロー物語の壁画を作るよう支持した（Kerny 2010: 259–260）。

34 ハンガリー国王としてはウラースロー1 世。

35 ポーランドをキリスト教信仰の防塁とする見方については、井内 2020 および Hopp 1992 を参照。

36 ただしそのようなシャーマニズムン的な要素が、ハンガリー人が古くに遊牧世界から得て保持し続けたものとは限らない。スラブ系の人々の間にも同様な文化的要素があった可能性があるし、次のような例もよく知られている。16 世紀から 17 世紀初めかけて異端審問にかけられたイタリアのフリウリ地方のベナンダンティと呼ばれた人々は、年に 4 回、夜に肉体から魂が抜けだして野に集まり、敵方の魔術師たちと農作物の豊凶を巡って争った。ハンガリーのシャーマンにも同様のものが見られたという。そのような世界観がハンガリーの民衆の中にまだ生きていたとすれば、宮廷文化における文脈とは別の文脈で読み解かれたこともありうるであろう（ギンズブルク 1996）。

37 モンゴル軍の前から逃げてハンガリー王国内に入ってきたクマン人を受け入

れた際に、王子イシュトヴァーン（後のイシュトヴァーン 5 世）とクマン人族長の娘の結婚が取り決められた（拙稿 2000）。

参考文献

研究文献

Bak, J.M. (1973) *Königtum und Stände in Ungarn im 14.-16. Jahrhundert*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GMBH.

Bak, J.M. (1982) Politics, Society and Defense in Medieval and Early Modern Hungary. In: J. M. Bak, B. K. Király (eds.) *From Hunyadi to Rákóczi. War and Society in Late Medieval and Early Modern Hungary*, New York: Colombia University Press, 1-22.

Benda K. (1939) A magyar nemzeti hivatás története (A XV–XVII. században). Budapest: Bethlen Nyomda.

Bertényi, I. (1996) Szent László kultuszának Anjou-kori történetéhez. *Századok* 130, 985–989.

Bogyay, T. (1986) A bántornyai falképek donátorairól. *Ars Hungarica*, 1986, 2.szám, 147-158.

Engel P. (1996) *Magyarország világi archonlológiája 1301–1457 II*. Budapest: MTA Történettudományi Intézete.

Engel P. (1998) *A nemesi társadalom a középkori Ung megyében.* Budapest: MTA Történettudományi Intézete.

Hopp, L. (1992) *Az „antemurale" és „conformitas" humanista eszméje a magyar-lengyel hagyományban.* Budapest: Balassi Kiadó.

Jánó M. (2007) Kire nyilaz a kun? (Adalékok a Szent László-legenda ikonográfiájához.) In: *Népi vallásosság a Kárpát-medencében. 7/1.* Sepsiszentgyörgy: Székely Nemzeti Múzeum / Veszprém: Veszprém Megyei Múzeumi Igazgatóság, 417–423.

Jánó M. (2017) Szent László, a lovagkirály. *Rubicon* 9. szám, 46–61.

Jékely, Zs. (2014) Transylvanian Fresco Cycles of Saint Ladislas in a New Light, *Hungarian Review* vol.5, no.2, 2014.
(https://hungarianreview.com/article/20140314_transylvanian_fresco_cycles_of_saint

_ladislas_in_a_new_light/) 2023 年 1 月 20 日最終確認

Kerny T. (1987) Szent László-kultusz a Zsigmond-korban. In: Beke László et. al. szerk. *Művészet Zsigmond király korában 1387-1437*. Tanulmányok. Budapest: MTA Művészettörténeti Kutató Csoport, 353-363.

Kerny T. (2008) Szent László és a magyar szentek tisztelete Hunyadi Mátyás ujvarában. Személyes devóció, állami és uralkodói reprezentáció. In: *Hunyadi Mátyás, a király. Hagyomány és megújulás a királyi udvarban 1458-1490.* Budapest: Budapesti Türténeti Múzeum, 397-400.

Kerny, T. (2010) Patronage of St Ladislas Fresco Cycles during the Sigismund Period in Connection with a Contract of Inheritance." In: L. Varga, L. Beke eds., *Bonum et pulchrum. Essays in Art History in Honor of Ernő Marosi on his Seventieth Birthday.* Budapest: MTA Művészettörténeti kutatóintézet, 259-272.

Klaniczay, G. (2000) *Az uralkodók szentsége a középkorban*. Budapest: Balassi Kiadó.

Klaniczay, G. (2014) A Szent László-kultusz kialakulása. In: Zsodos A. (szerk.) *Nagyvárad és Bihar a korai középkorban*. Nagyvárad: Varadinum, 7–39.

Korai magyar történeti lexikon (9–14. század). Budapest: Akadémiai Kiadó, 1994.

B. Kovács, I. (2019) Az elveszettnek hitt magyar hősepikáról. *Országépítő* 30(1), 65–67; 30(2), 77–81.
（ https://epa.oszk.hu/02900/02952/00145/pdf/EPA02952_orszagepito_2019_1_064-067.pdf / https://epa.oszk.hu/02900/02952/00146/pdf/EPA02952_orszagepito_2019_2_076-081.pdf ）2023 年 1 月 20 日最終確認

Kubinyi A. (1999) Mátyás király tisztelete a Patrona Hungariae iránt. In: Kubinyi András, *Főpapok, egyházi intézmények és vallásosság a középkori Magyarországon*. Budapest: Magyar Egyháztörténeti Enciklopédia Munkaközösség, 335–339.

Lángi J. (2001) Új, eddig ismeretlen szent László ábrázolások falképeken. In: Barna G. (szerk.) *A szentkultusz történeti rétegei és forrásai Magyarországon és Közép-Európában: A magyar szentek tisztelete.* Szeged: Szeged Tudományegyetem, 80–97. (https://acta.bibl.u-szeged.hu/69951/1/szegedi_vallasi_008_080-097.pdf) 2023 年 1 月 20 日最終確認

László Gy. (1993) *A Szent László-legenda középkori falképei*. Budapestá Tájak–Korok–Múzeumok Egyesület.

Lukács Zs. (1980) A Szent László legenda a középkori magyar falképfestészetben. In: Mezey László szerk., *Athleta Patriae*, Budapest: Szent István társulat, 161–204.

Madas E. (2008) *Középkori prédikációk Szent László királyról*. Budapest: Romanika Kiadó.

Magyarországi művészet 1300–1470 körül. I. (szerk. Marosi E.) (1987). Budapest: Akadémiai Kiadó.

Marosi E. (1973) A XIV–XV. századi magyarországi művészet európai helyzetének néhány kérdése. *Ars Hungarica*, 25–66.

Marosi E. (1995) *Kép és hasonmás*. Budapest: Akadémiai Kiadó.

Prokopp M. (2017) Szent László-ábrázolások a Felvidéken, Gömörben és a Szepességben. *Rubicon* 9. szám, 62–65.

Sashalmi-Fekete T. (2020) Újabb kutatási eredmények a Szent László-legenda falképeiről. In: *Székelyek a keleti végeken - Harckészültségben minden időkben*, Székelyudvarhely – Székelyderzs: Arany Griff Rend Egyesület, 29–48.

Szovák K. (2017) László-legendák. A csodás történetek háttere. *Rubicon* 9.szám, 41–45.

Terbe L. (1936) Az európai szállóige életrajza (Magyarország a kereszténység védőbástyája). *Egyetemes Philologiai közlöny*. 60, 297–351.

Vargyas L.(1980) Hongoglalás előtti hagyományok Szent László legendájában. Mezey László szerk., *Athleta Patriae*, Budapest: Szent István társulat, 9–19.

Veszprémy L. (1999) utószó, In: *Anonymus, A magyarok cselekedetei: Kézai Simon, a magyarok cselekedetei*. Budapest: Osiris Kiadó, 155–161.

Vizkelety A. (1981) Nomádkori hagyomámyok vagy udvari-lovagi toposzok? (Észrevételek Szent László és a leányrabló kun epikai és képzőművészeti ábrázolásához). *Irodalomtörténeti közlemények*, 253–275.

井内敏夫（2022）「ポーランド「防壁」論の歴史的考察」井内敏夫『ポーランド中近世史研究論集』刀水書房、75–110。

ギンズブルグ, C.（上村忠男訳）（1996）『夜の合戦: 16-17 世紀の魔術と農耕信仰』みすず書房。

鈴木広和（2000）「中世ハンガリーのクマン人とラースロー4 世」木村尚三郎編『学問への旅：ヨーロッパ中世』山川出版社、78–96。
鈴木広和（2011）「中世ハンガリー王国の聖王伝承における魔」『平成 22 年度文部科学省科学技術試験研究委託事業「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業（イスラーム地域研究機構）京都大学拠点強化事業報告書』21–34。
鈴木広和（2015）「ハンガリー国王マーチャーシュ 1 世の正統性と適格性」『平成 23 年度～平成 26 年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果報告書 中世カトリック圏君主権の神話的・歴史的正統』35–45。
原野昇・木俣元一（2009）『芸術のトポス』岩波書店。

史料

Bonfini, Antonio, *A magyar történelem tizedei*. Budapest: Balassi Kiadó, 1995.
Chronica de Gestis Hungarorum e Codice Picto Saec. xiv. The Illuminated *Chronicle. Chronicle of the Deeds of the Hungarians from the Fourteench-Century Illuninated Codex.* Budapest / New York: Central European University Press, 2018.
Gesta : Simonis de Kéza 1999: *Gesta Hungarorum*. CEU Press, Budapest / New York.
Magyar Anjou legendárium. Budpest: Magyar Helikon, 1973.
Johannes de Thurocz, *Chronika Hungarorum I. Textus*. Budapest: Akadémiai Kiadó, 1985.

壁画

szentlaszlo.com （https://www.szentlaszlo.com/）2023 年 1 月 20 日最終確認

図引用元サイト

図 1 ヴィトファルヴァの壁画
Wikimedia Commons, , File:Vitkovce2FotoThaleTamas.JPG （Author: Thaler Tamas）（2023 年 1 月 20 日最終確認）
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Vitkovce2FotoThaleTamas.JPG
図 2-1 『ハンガリー・アンジュー家聖人伝』
Országos Széchenyi Könyvtár ホームページ（2023 年 1 月 20 日最終確認）
https://www.oszk.hu/sites/default/files/virtualis_kiallitasok/harom_kodex/siteeszkoz/k

epek/kiallit/virtualis/3kodex/mal/n53.jpg

図 2-2 『ハンガリー・アンジュー家聖人伝』

Országos Széchenyi Könyvtár ホームページ（2023 年 1 月 20 日最終確認）

https://www.oszk.hu/sites/default/files/virtualis_kiallitasok/harom_kodex/siteeszkoz/kepek/kiallit/virtualis/3kodex/mal/n54.jpg

図 3 カラスコー壁画（合戦・追跡の場面）

出典：Wikimedia Commons, File:Kraskovo church - Saint Ladislaus legend mural (detail).jpg （2023 年 1 月 20 日最終確認）

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kraskovo_church_-_Saint_Ladislaus_legend_mural_%28detail%29.jpg#filelinks